

る跡なれど草臥しまゝ安心して寐る

廿六日朝木風迄六り半有て夕方に登りの夜舟を出すけふ東風ふか登りなりとて八比ツには着くべしと思ひ仕立舟にのり快晴にて兩岸を詠めるに神寄の森大樹數多繁茂して高山の如し源太河岸も過る比又船すゝまふあたかも蚯蚓ののたくる如く船頭腹痛にて毎度船をつけ大小便に行手夕の船にこりたれば晝舟にのりたるに戸根川誠に長くして流れ早く田川といふ所にて船をつけ晝飯をくふに此方の顔を見て急にめしを焚く杯際とる事甚しく又船にのり味氣にてすり網引上たるを見るに大きな鱒三尾鯉五六尾もとれて見るに興有船頭舟をつなき捨何國へ行しか見へず喜平治呼わりければよふく歸るに大小便に行しとこたへふせうぐに船を漕舟の連來れば素湯など貰ふてのミ又日を暮させん計略也と思ひしゆへ早く船をやれと云此船頭ハ腰のかまぬ崎もの也押砂る三社廻り壹貫八百文板久にて南鐙の祝義けふ木風迄六百文泊り中飯共此方まかなひ女郎迄買ふてつかわせしゆへ増長して船をいそがぬ心底なり腹にすへ兼中程の上らんとすれど今少しなりと又そろくくと船を漕今一里もあらんと思ふ比雨ふりけり夕やみに泉二疋啼つれて飛行杯面白からぬことのみ暮半よふやく木風に着橋詰壁なし屋といふ宿に泊る夜ととも奥座敷にて爰の女房もとの銚子か板子の藝者の果と見へ客と、いつ杯うたひまやれる事かしまし

廿七日小雨ふれ共晴そふなれば爰を出龜成る銚子道本街道に歸る一里半にして曠々たる原にかゝる野飼の駒二三

十疋所々に集り親馬動けば子も動き戯るゝさま晝にかくとも及ばじ神々廻茶店一軒有て人家はまれくも也街道の兩側並木の松之餘ハ何里もあらんと思ふ原也白井橋木戸をこえ二里半にて鎌が原宿とて小がねが原より續きの原なり

馬の寐るだけは窪ミし焼野かな

爰にて中食して潮來の商人とはなしながら二里の道もちかく覺へて八幡梨子畑を過て

李婦人に番たのミたし梨子の花

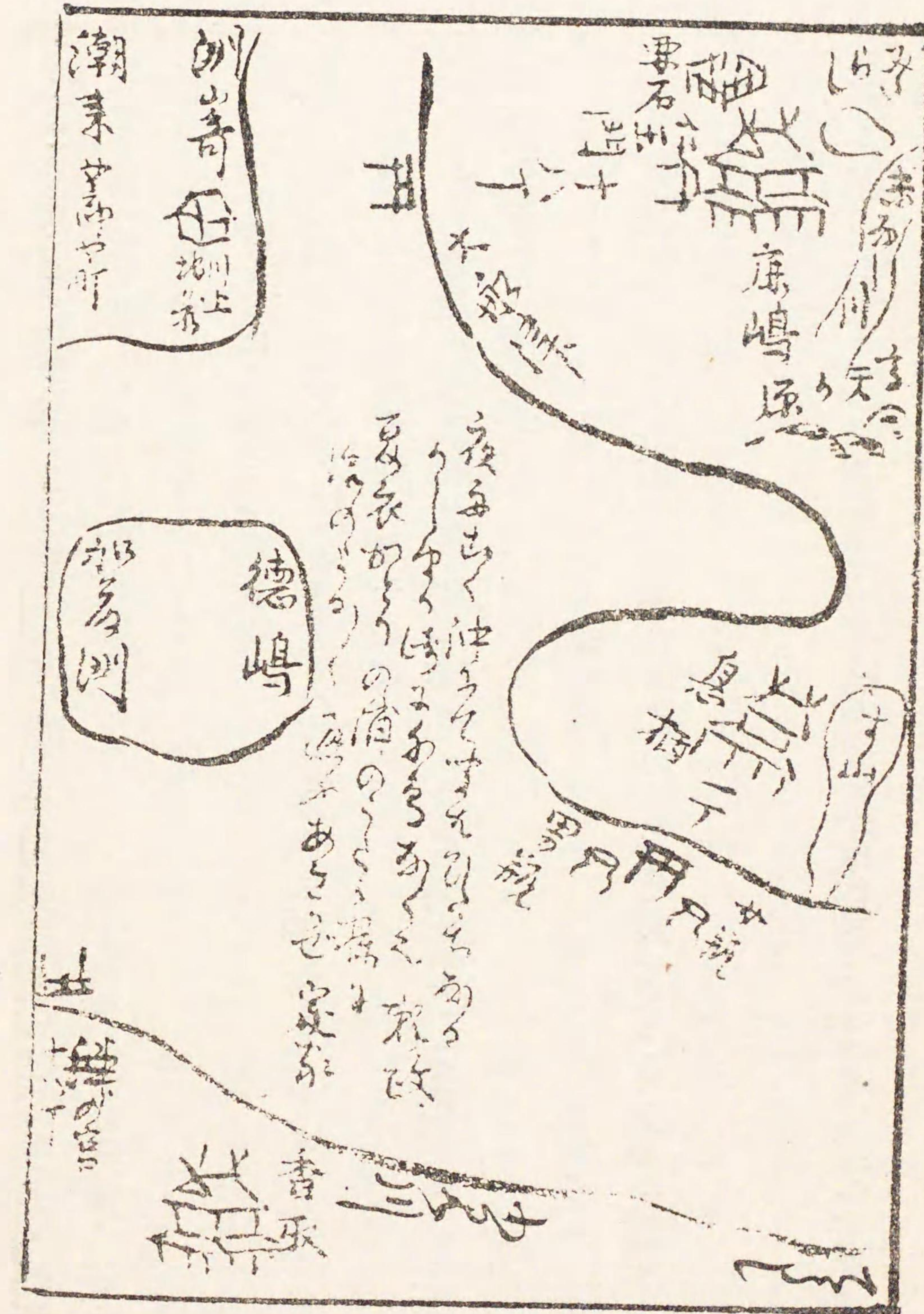
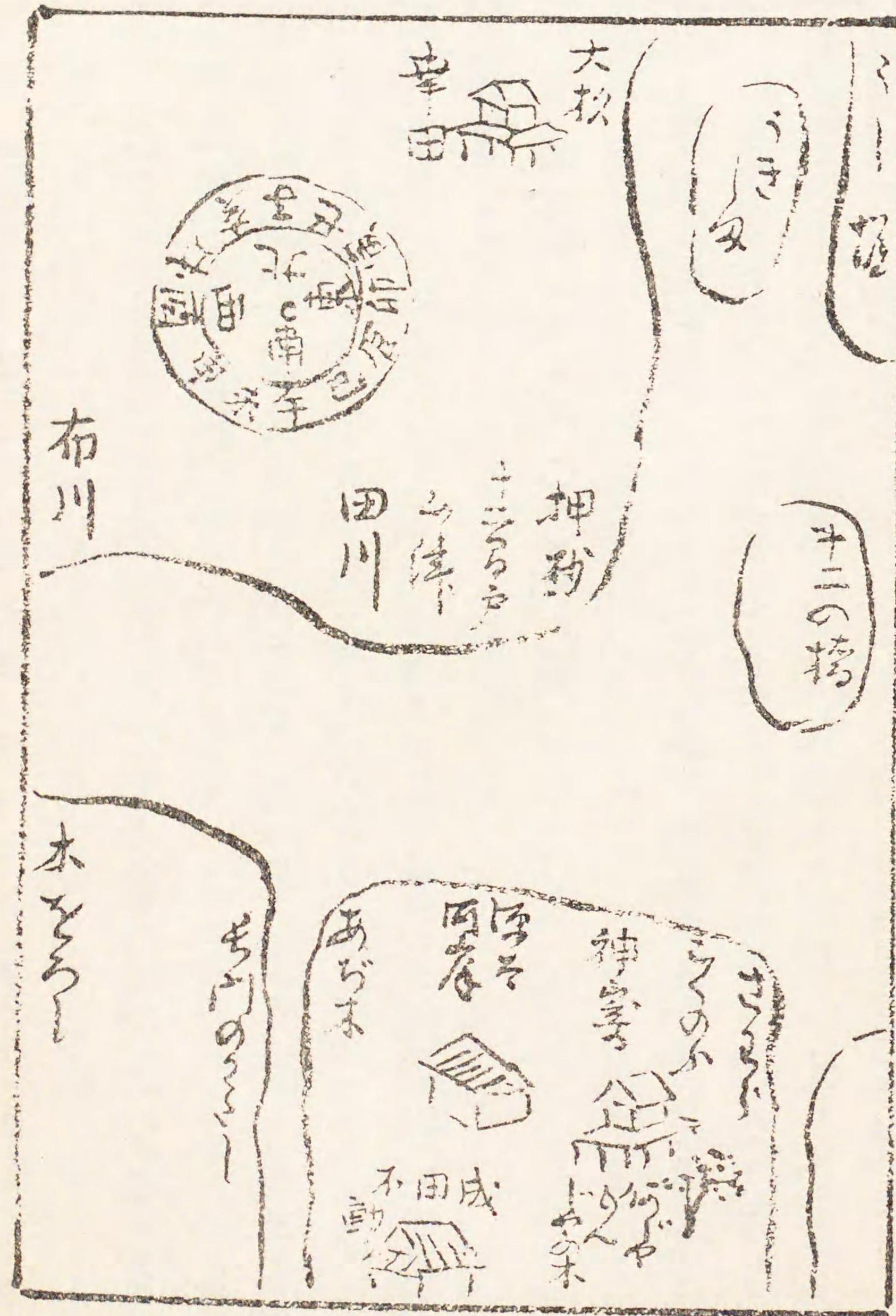
土産に梨子をもとめ市川の渡しをこへ繼鴻の臺は以前參詣したればこなたも詠めつゝ潮來の旅人とわかれ奥戸の渡しをこへ引舟にて酒をのミ隅田川邊に出て

ことゝわですませつ雁はいに支度

向ふじまの堤は櫻所々に残り花見の羣集賑わしゝ予は橋場をわたり七ツ前よふやく宿にかへり湯に入り酒もりして休息せしこそ目出たけれ



同四月朔日三丁目芝居を見物に行しに八代目三升父海老藏にあへん爲名殘狂言として伊達の七役安宅の辨慶をつとむ予も此あたかを見て父海老藏が姿をまのあたり見る心地して



辨慶のよく似合けりはつ裕

同三月十日比、四五人の友を誘ひて、竹屋の向ふ越をして、向ふ嶋の花を見に行、抑さん屋船をチヨキといふこと、そのかミ二挺立のはやりし比、専らに乗りし船頭を、長吉とい、しが、二挺だち禁止の後も、是が舟は格別に早かりしゆへ、人々長吉をもてはやし、後は名目となりて、長の字をつめてチヨ、吉の字を略してキ、合てチヨキと呼びしと也、今猪牙を以て字とす、猪の牙に似たるゆへ、るのきなどいはゞ尤ならん、チヨキとハ訓じがたしと八水隨筆に有、さもあるべしなど咄すうち、船は三圍の河岸に着、平岩向島の料理屋にて料理誂らへ丑御前長命寺杯見ありきて

割飯の出来る間に見る董かな

嘶の序に、幫間、牽頭の通號を太鼓持と云は、紀州和歌山の祭禮に、雜賀囃子と云有、鉦と太鼓を別々にもたせ、囃子ながら神幸す、兩方ともおもきこと甚しきゆへ、太鼓もつものはかねをもつことあたはず、鉦をもつ物は太鼓をもたぬの謂也と、草茅危言に有、近頃禁止ありし深川の子供藝者を羽織と云しは、腰より下は賣ぬとの心、又隠し賣女を地獄と云は、以前清左衛門と云者の思ひ付しゆへ、箱根の地獄清左衛門より呼し名なるとぞ

爰に故人櫻田治助左交 作の淨瑠璃に、八百萬箇生梅枝、此口説の文句を讀むに

ほんにわたしが身の上をいわかたらばきぬくに、身を志る雨の帛紗帶、結び捨たる淺草の、まだ名所は白髭や、身を吉原にうきつとめ、秋葉の紅葉色ミえて、かゞみが池へ向ふ嶋、たしなんで見たる衣紋坂、いつ三圍と大門の、縁の橋場も有ならバ、嬉しの森や花川戸、庵崎戀し隅田川、ニツならべし枕橋、その首尾の松、待乳山、添ふて箕輪と明くれに、日本堤の神さんへ、無利な願ひも戀の知惠、淺茅が原じやないかないな、コレ是程に胸の闇、色をも香をも志る人をせめて恨みて梅屋敷泣て初音やもらすらん以下略

此淺草名所の文談は、その比淨瑠璃にもはやり、今にも古風な人わ覺へて改もの也、五六十年の流行移り替る世の中との言乍、餘り名所盡しをいわんとて筆拍子に乗り同じ淺草近邊の地名ながら往ては還り、隅田川斗でも何遍か渡らねばならず此口説の文句の通り歩行バ何程の道法やらんと三舁屋二三治老人と連立文句の通り春日未明、麻裏草履脚半がけにて出かけし事有

むすび捨たる淺草のまだ名どころハ白髭や、雷門より東橋を渡、身をよし原に愛勤へ吉原迄十三丁、秋葉の紅葉色ミえてよし原方橋ばを渡、鏡か池へ、秋は方東橋を渡りか、向ふじま、同じ道の、たしんで見たる衣紋坂、同じ道の、いつ三めぐりと同じ道、大門の三圍方東橋を渡り、縁の橋場も有るならば、出てはしば迄廿壹丁、嬉しの森や、わたり嬉しの森

迄十 花川戸 嬉しの森方東橋 五百寄戀し 花川戸方東橋 隅田川一 二並べし枕橋り枕橋迄十丁 其の首尾の松十五
 三丁 待乳山同じ道に 二ふて箕輪と明くれに十 日本堤の神さんへ三 浅茅が原じやないかいな七 せめて恨みて梅屋敷
 今戸を通東橋を渡り中の郷方 此道法をちかく積つて凡貳百七十八丁有、七里廿三丁餘也、此文句の通りまじめに歩
 土手ついき梅屋敷まで廿九丁 行、茶酒飯と休むこと度々、吉原近邊、橋場の渡し場ニても、餘りたびく通るゆへ、狂氣でもせしか、但し狐
 にでもつま、れしかと、そしらるゝをもいとわず、足にまかせ夕暮によふく廻り納たり、七里餘といへど十
 里は丈夫にて、大草臥、翌日四五日腰痛にて休まし事、故人左交は嘸黄泉より悦つらなが、嗚呼痴なる哉

西の四月三とせふりにて歸國せんとて例の出たためをかく

西澤九左衛門作

極樂蜻蛉 本調子

杵屋和八調

蜻蛉と源氏の巻の名によばれ、又わらんべに釣られては、やんまくといやしめど、そも日の本の國々は、我が
 たちより秋津むし、あきつ國とも名付しと、思へば心高くと、飛めぐる身のおもしろや 扱極らくといふ時は、
 十萬億土西の國、淨土産れのやうなれど、是は難波のよしあしと、都の嵯峨の口悪く、歌舞の井の住所に、あそ
 びあきつ、武藏野や、吾妻をさして鳥が啼、羽根は上野か浅草か、爰にも三とせ隅田川 秋をまつ乳の山くこ
 へて、歸る雁さへある物を、我も故郷のそらなつかしく、のほる道者やみちのくの、赤蜻蛉にさそわれて、とん

ほう歸りするぞたのしき

○

西澤一鳳軒主人此三とせの開東都に遊れしも、此夏歸國せられんと、その名殘狂言にかゝ見山の増補を書れしか
 ば、我等も扇岩藤、鳥井又助、玉置喜平の役をつとめ餞別の一句を送る

魁香舎鴛雀

若やけよ若葉にむかふ鏡山 澤村訥升
 ともに馬のはなむけせんと思ふ折ふし、富士見西行の役をつとむるゆへ、こゝ故人來芝が當り藝なれば、本利や
 れくくと二句を吐く

澤村訥升

富士を見て包ミをとけよ初裕

我等も浪花なる父にあわんか爲、此程名殘狂言に、安宅の辨慶をつとむるに、一鳳主人の逸早く、古郷へ歸らる
 浦山しさに餞別を言送るとて

八代目三升

鈴かけや時は旅路の更衣

三座の座頭その餘たれくよりも、はなむけの句を送らるゝ嬉しさに
 よし切やなにはの芦へ飛移り

西澤一鳳軒

嘉永己酉年卯月十九日、甲府街道より中間をかへらんと、留別の盃すミ、供をつれ澤田家内、觀音の門前迄見送り、福森久次、澤田利助、角力淀川、三人湯島迄送り、爰にてわかれ苗木山樅木氏にて門前より暇乞すミ、市が谷より三途川姥へ參詣し、四ッ谷新宿を内藤新宿といへるはいにしへ、内藤家の屋敷なりし故云とぞ、直は青梅街道にて、右は甲府街道、追分に暫らく休息し、下高井戸にて中飯を認め、上高井戸堀兼の井は此邊にあり、布多里布田とも書、石原上下、國領を合せて、布田五宿と云、往昔調布を作り貢とせしゆへ布多と云とぞ、武藏野は南へ多磨川、北は荒川、東は隅田川、西へ秩父根を限り、多磨、橋樹、都筑、荏原、豊嶋、足立、新座高麗、比企、入間等、都て立緯十郡に跨る、草より出て草に入る又、月の入るべき山もなしなど、代々の歌人袂を志ほりしも昔にかへり、天正此かた江戸の地を以て御城營と定られしより、原野も田に鋤、畑に耕し、尾花の浪も民家と變じ、わづか萬が一を此邊りに残す、大野といへるへ武藏野の舊跡也、逆水も景物のひとつ也、セツ時府中に泊る

逆水に走りまけたり夏の月

廿日朝晴六所明神社へ、府中驛の左り側に有、此邊の大社にして五月五日の神事へ武藏一國の見もの也、爰に詣る内、甲府の男道づれと成りて、日野迄來る内、空曇り今も雨の降るべき體也、多磨川へ此西にして六玉川の一也、調布やさらす垣根の朝露にと定家もよまれ、玉河にさらす手つくり更に世を頼む日かけの哀過行、と家隆

も詠じ鮎をもつて名産とす、予ハ八王寺にて名物の鮎の煮たるにて中食をして

玉川や田つくりよりは鮎の旬

駒木野の關所前にて雨具をつけ、手形を出し、關所すミ、小佛へかゝる峠にかゝり、きのふ天氣過しとつばやき乍行、此峠甲相武、三國の境也、小原も過與瀬角屋と云る茶屋より近道ありて二瀬越と云道へかゝる、渡し舟二度ありて、甚けんそなる道、よふくよし野にて酒を吞勞れをやすめる

藤咲や雨の旅路は與瀬芳野

關野、さかい川へ甲武の境關所有、目禮のミして爰を通り、夕方上の原甲州ものと三人泊る、雨ますく降りて音を聞さへ、翌の道案じ乍寐る

廿一日大雨に恐れ、朝遅く立て霧川迄來るに、夕の雨にてつる川板橋落かけ濁り水へ橋の上を越してけんのいんわん方なし、袖のたすけにてよふく越、野田尻、大目より山谷坂にかゝる新井、改坂東壽太郎、江戸表芝居へ行に逢ひ、互ひに無事の咄をしてわかれ長たらしき山阪をこへ、鳥澤より猿橋へかゝる、猿はし、夏木立若葉の茂り橋上誠ニ絶景也

猿はしや木から落たる樹の雫

此驛にて中食をして、例のたへことを吐く

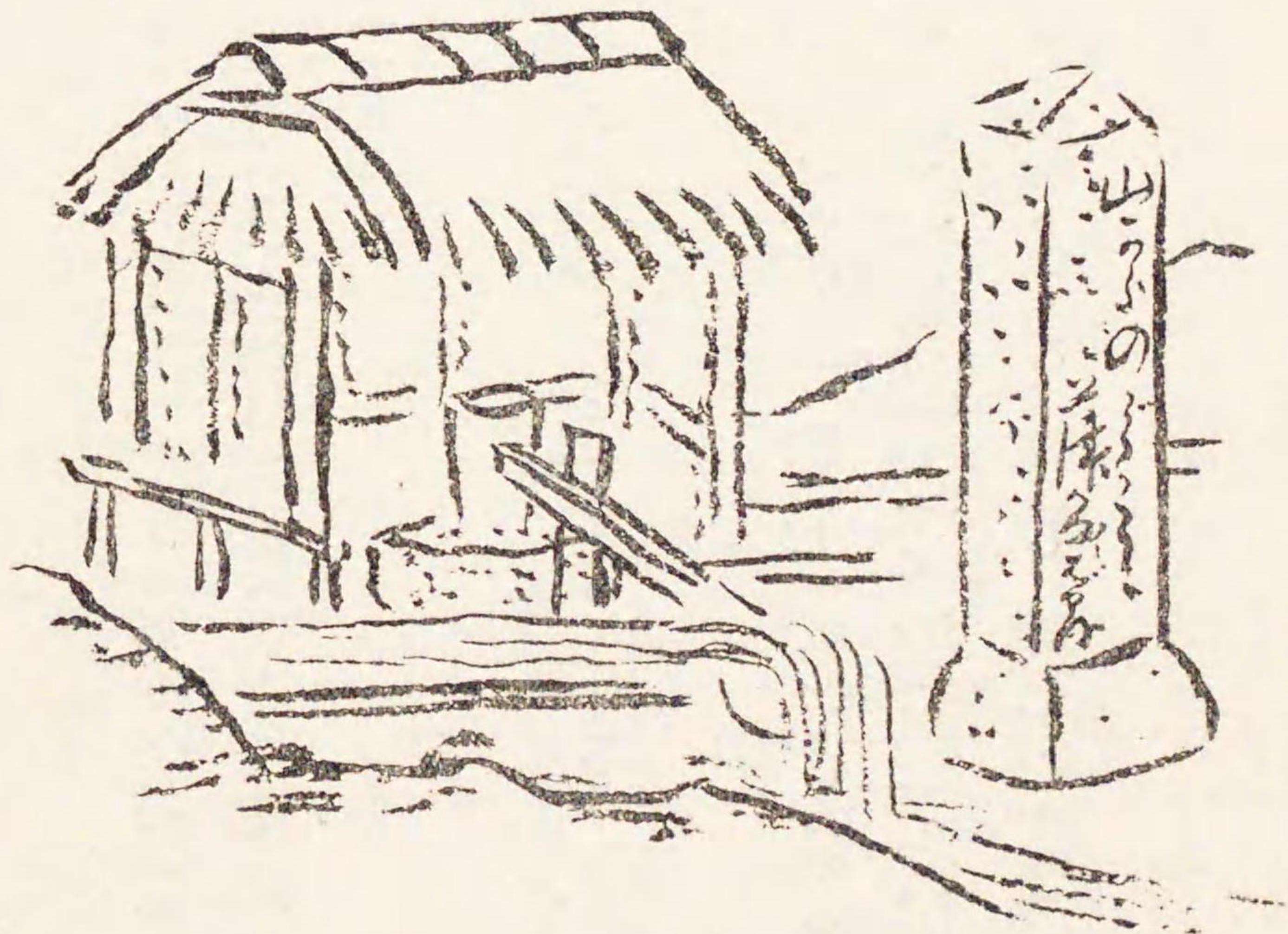
料理には魚身鳥皮よろこべと

扱もあんどき犬目鳥澤

駒橋、大月、花咲、を過る比より雨底明りして、漸
晴る、大月と花咲との間に、舊塚とて翁の塚あり爰ら
に限らねど圖の如く溝川の流れに米搗の杵をまかけ、
すゑを杵子の如くして水一ぱいに及びぬれば杵の頭上
りて水下へ落れば杵の頭白の中に落、米を搗く事日に
三臼斗りにて差略よく風雅よく風雅は田舎に有感すべし、初雁
の里一里餘布織る冢ばかりにて休息所もなし、驛の入
口に句碑有、名は忘れたれども、歸るさへ霞をわけて
行しかどおほつかなしや初雁の里予も又里の名のやさ
しさに季はをくれたれど

初雁の里に居黒む燕かな

白野の驛を過、七ツ時比黒野田に泊る



廿二日快晴夕初て蚤にせ、られてろくに寐られず、笹子峠にかゝり休むこと度々名物の甘酒をのみ、駒飼より、
關所は辭義して通り、勝沼にて鹽鯖にて中食、此邊看ハ沼津より來る由、栗原、石和、笛吹川を渡り、
甲府の町長々しく、城の前にて左りへあゆめバ鎌倉街道なり、元來身延山へ參詣の心にてありしが、長の旅路を
出るより早く雨ニあひ、足弱りたれば甲府より身延へハ布施、かぢか澤、切石、下山を行て十三里、七面山へ登
るに上下二日路、歸路葦崎へ又十三里ありとき、て

山坂をゆくも七面堂なれば餘所に身延をふし拜つ、

足を早めて葦崎道へかゝる此邊ハ裏富士を見て

裏富士の嶮なるは此日和かな

あら川舟渡しをこへ河原にて日暮、よふくにして灯影を見付、ぬかり道へ足踏込ミ、難澁いわん方なく葦崎に
泊り、按摩來つてもませ寐る

廿三日爰を立出臺が原にて中食、教來石にて、水音や馴て水鶏の啼なへに、馬酔と云句碑を見る、此邊の馬皆親
子づれ也、三月晦日に産れし馬、かたちハ鹿程有ていとかわゆし、十貫めの荷をつけ甲府迄行還る由、直打ハ三
兩斗り也とぞ、男馬は安く貳兩位也との咄しを聞、供のものに色咄をさせ受ながら關所を打通り役人に呵られあ
へて笠をぬぎ辭義をして通りしもをかし、此道川原傳ひにて草臥たればきのふの入合せ早く宿らんと、甲信の境

の橋をこへ葛木に泊る時ハ八ツ半也、髪月代をして茶などにさせ餞別の砂糖菓子を喰ひ按摩來つて咄すに、此邊の川かまなし川と云末ハかぢか澤に落て東海道富士川へ流るゝと也

廿四日夜半より雨の音して、夜明雨ますます降る、夕約束の馬に乘られず、雨具をつけ、ごふどが原にて酒をのミ金澤の驛の入口に御射山道と標石有、こへ玉葉集に 尾花ふく穂屋のめぐりの一むらにまばし里ある秋の御射山 金刺盛久、續古今に 夜寒なる穂屋のすゝきの秋風にそよぞ鹿も妻をこふ覽、關白左大臣などの古歌ありて文月廿六日より廿九日迄假屋を作り、世をもて葺、是を穂屋の神事、御射山祭とも云、兼て尋ね(ま)ほしき名所乍、雨に濡れゆかず、此宿にて書飯あたゝめ、圍爐裏へ草鞋をはきながら濡りをあぶり、爰より直を行ば上諏訪、すはの湖 高嶋の城を過、下諏訪へ出るを中仙道へ出る順道也、予ハ此宿の上のはづれに左伊奈街道と傍示有方へ入て直に山坂にかゝる

御射山や雨に濡れ臥す青芒

高き峠に登る爰に東諏訪因幡守領、西内藤駿河守領と印有下り坂に迂ること度々みとがへにて休ミ雨はれて七ツと覺しき比高遠の山城を詠めて城下に泊る

廿五日晴朝とく出て、いなべを行を順道なれど近道へかゝり街道を右へとり又左りへ曲りて辨天橋を渡りいと長々しき道をこへ川原をつたひ若狭橋を渡り澤の渡村にて始て辨當をつかひ、それより一里ばかりにして、よふく

宮田につく、三りといへど、中々五里もあるべし、うへ穂、上の出はづれに澤村東藏の石碑有、天保十二年と印、此驛にて死したるなるべし、飯島を過て川原あり、山あり、雨雲かゝり西風烈しく、大澤村に素人芝居ありていと賑わし、爰にて酒呑、此いきをひにて七ツ時 片桐の宿に泊る

紫陽花や子馬に呑す馬の乳

廿六日快晴、夜明家内を起し爰をたち出て、大嶋、市田、牛牧と云所に、徳本上人の石碑、秋葉金びらの、見事なる立石有、書ハ叡山阿奢梨也、是より山吹新田を過ぎ、飯田の城下にて、うどんと餅などくひ、馬二疋かり、供も乗せ爰を出る、飯田の町繁昌なり、城の大手の門の傍に、裸の釣鐘つりあるもおかし、駒場にて馬を下り辨當をつかふとて

飛下りて共に呑立つ馬の蚤

又山坂にかゝり、小野川村、大野村、長きこと甚し、中程に春日山に似たる山有、七曲りより一り半にして浪合に泊る

廿七日晴爰を立出、關所を通り、それより山坂道長たらしく、平谷も過、次の茶店にて辨當をつかひ、所々にて蕨をとり、根ばねより又山道にかゝり、凡半道斗にて月の瀬村と云所より、橋きへに傍示杭ありて、すぐうへ村あけち道、左り名古屋道とあり予はぶせちとあけちと取違へ、河原をつたひ、錢とり橋を渡り、峠へかゝり川柳

を吐く

峠みち人を上たり下ろしたり

峠にても人家なし、せん方なさに辨當の残りをつくひ、ふと帳面を出し見ればせちなり、あけちは八里ありて、濃州街道也とき、もとの橋ぎへ引かへし、よふく本街道に出て、又峠をこゆる、是信三の國境也、三河入野村にて砂糖湯をのみ、所々にて、郭公閑子鳥をき、乍、よふく七ツ時、武節に宿る、都て此街道は、善光寺身延山、女の參詣道にて、不自由なること甚しく、殊ニ農業に隙なき時分にて、馬駕籠もすくなく、質素なる人氣にて、仁に近しとへ此街道の者をいふべし、信濃路は寒國にて、櫻山吹など、山中に咲亂れ、藤の花樹木にからみ、風がなること感にたへたり

廿八日晴、宿の庭におだまき艸、岩ざくら、櫻草盛りにて詠いとよし、爰をたち商人壹人道連と成り、いろく、と嘶の内、此宿の百姓礮山と云男、吉田のいらこに、礮丸といふ哥よみの弟子となり、諸病を直すに即座に哥をよみ、直すに甚ふるし有とて、近在病人をつれ来る事おひたしく、此商人も齒の痛みの折、よんで貰ひし哥大方すれしとて云、いろくの妙なることをする人もある物也と獨笑ひぬ、程なく峠を一ツこし、又次に石龜峠有、是名古屋迄の、峠の名残にて、跡は下り坂斗にて道いとよしとき、安心し、峠の出し店、茶も樽に入れ、ふんこを賣、是に砂糖をかけて食に、咽をとぶが如し

おだんだをふます石龜とふけとてやれふんこやと喰ふも名物

是よりあす川驛、宿屋五軒斗有山中なれど奇麗也、爰にて商人とわかれ辨當をつかひ、足助の城下商人多く軒を並べ、繁昌の地なり、上の出口に追分有、右は名古屋、左は岡崎道也、左りの驛に宿り、兩人髪月代に床へ行、晚蚊甚しきゆへ初て蚊屋を釣らせる、三河路ハ暑もつよく、芥子の花、桐の花、所々にて見る、宿の主病身ゆへ、中風の御符をやる、嬉しがること甚し

廿九日小にて晦日也、宿を出て直に左り川の渡しをこへ、伊保宿にて小休、三本木にて中飯濟平針へ出す、藤の森村にて、雨ふり出し、雨具付、名古屋北の口入て町を見る、尾州公此程御逝去にて、近々御停止も出ん、此十壹ヶ年に九度の御出棺有りしと云、本町通りより、御城を詠めて

鯨の尾 鱈かゞやく茂りかな

札幌を南へ曲り、橋丁裏町、芝居看板を見る、多見藏、嵐吉、梅之丞也、雨ますくふるゆへ樂屋へも音づれず、熱田の宮をふし拜み、宮の驛に泊る、今晚紀州の商人二人泊居て、是も十九日に江戸を立しに、二日半、川づかへ有りしゆへ、けふになりたりと聞、壹人の若もの女郎買に行ゆへ予が供も一處につかわし、蚊にせ、られ乍寐る名古屋ふしになぞらへて

臺座どもならぬ雨也 蝸牛

閏四月朔日朝、女郎買の兩人歸れど、大雨なれば船も出ず、佐屋廻りせんと爰を出

降りつゞく雨の旅差興さめてせん方なさの佐屋まわりかな

名古屋より、岩塚の渡しをこへ、萬場にて酒呑、津島の社わたこなたより拜ミ、佐屋の驛にて中食し、四人にて船壹艘かり切、番處相濟、砂川原、壹里斗もあゆみ、乗場より船にのるに雨は晴れたり、水鶏なくと人のいへばやと、翁の句を思ひ出て

雨の佐夜水鶏きく氣で出かけけり

船に帆をかけ、船頭なまり聲にて祝義をこふ、うるさければとらせ、七ツ時船着き、桑名に泊る

二日曇り乍降らず、四人連にて爰をたち、富田にて燒蛤にて酒、四日市も過、日永より追分にて中食、鳥井前にて、紀州者にわかれ、伊勢街道に入り、高岡川長き假橋を渡り、神戸、玉垣、白子、此宿甚長し、觀音の不斷櫻を見るに、實に花すこし咲有り、冬さくハ神代もきかぬ櫻かなと、宗祇の句あり予は

春降りて常より多き櫻かな

常盤木の落葉に鄰るさくら哉

奈良の都の時、此樹を禁庭に召されしに、枯たりければ、御製をそへてかへし、植させ玉ひしかば、枝葉生茂りてもとの如しと云、上野より駕籠にのり、江戸橋へ京道と江戸道の追分也、長き町を過、此夜は津の驛に泊る

三日夜の内より大雨ふる音に恐れ、朝ゆるく爰を立出、國府の阿陀彌へ詣、土俗誤つてこのあみだと云、安濃の津と云を、たゞ津とのミ呼て、阿漕が浦の安濃の浦也、阿漕平治といふも、人名にあらず、伊勢平氏よりとなへ出したり、度かさなればの歌も鯛かさなればにて平治鯛も阿漕より呼しなるべし、予も又似口にて

この阿彌陀にお目にかけて候初鯉

閻魔堂前より、小雨に濡ながら、雲津川、月本六軒に忘れ井の水の標石有、齋宮の和歌有、松坂にて中食、愛宕山龍泉寺へ、左側にて芝居あり、爰を愛宕丁と云、尋ぬる人有て、歸路によるべしと榊田川を渡り

葉柳や風透のよき榊田川

齋宮の舊跡は街道の詠、明星にて駕に乗小俣より宮川を渡り、山田に着、駕をかへして外宮へ詣るに、郭公啼ここと數聲なり、西行上人の詠を思ひ出て

有がたさに泪こほせり郭公

末社をめぐり、高倉山より天岩戸に詣て

神寂ぬ岩戸につゞく木下闇

宿へかへつて休む、終夜子規をき、寐る

四日快晴妙見町、相の山朝早ければ淋しく、古市、油屋、杉本屋、を覗き備前屋の座敷を思ひやりて

短夜や 駢聞ゆる 車の間

牛谷と云も、やはり合の山と世人となへ、尾上坂へ山田領拜田村へ出、牛谷坂へ、宇治領谷村へ出る、ほいと、
ハ単人の轉語也とぞ、中の地藏をふし拜まつ、宇治橋へ、五十鈴川、御裳濯川とも云て、橋下に網をもつて、
錢を受るにとらせて

宇治はしや 錢受とむる 蜘蛛の網

内宮へ詣るにことしハ御迂宮にて普請最中也、申も中くかしければ、末社ことく廻りて、淺熊二見は重
ねて參詣の時にと宇治橋詰にて、土産物をもとめ、宇治惣門を出る比は早、相の山にお杉お玉出かけいること
くく錢をとらせて

化粧するお杉の顔や 玉の汗

行々子比丘の態に 紛れけり

古市芝居には、名古屋裏町の役者の、まねきを並べて近々爰に移る様子也、今一軒ハ子供芝居にて初り有、山田
を通り宮川を渡り、小俣にて貝をもとめ、明星にて中食、くし田の川はたより馬にのり、松坂藤の茶屋にて馬を
下り、久保村専行寺に行、爰の住持ハ占ひをせられ、先年澤田屋を見し時、よく占われしゆへ、その禮を言のべ
んが爲也、よふくもとの棒屋軒毎に並びある所へ出で

棒屋から藪へふんごむ占ひ者著も 違わす尋ね當つた

松坂愛宕丁壺屋へより酒とそばにて呼れ、鹿の角細工などもとめ乍足をはやめ

松坂を越へてさかりや 踊り草

六軒月本とめ女大勢出てうるさし、夕方雲津川をこして、雲津に泊る、蚊屋の内より夜と、も馬の物くふ音する
ゆへ、翁の蚤虱の匂思ひていと佗し

五日晴宿の馬をかりて、香良洲御前の社は馬上よりふし拜み、津の町、大橋も過、塔世橋にて馬を下り追分を左
りへとり、一身田高田専修寺は外へ拜み、窪田宿もこへ、豊久野錢かけ松を見て、椋本にて中食、迷ひ道をして
よふく、楠原より、關川の假橋を渡り、關の宿をすぎ筆捨山にて名物の鮓をくひ

筆捨や 狩野も 及ばぬ 鮓の味

坂の下ニハ大竹小竹といへる、音頭を思ひ出で

寄のふとしき 株や 坂の下

鈴鹿峠の茶屋にて、郭公をきながら、名物のあるこをくひ、足をはやめて蟹が坂にては、子供に飴を買ひ、夕
方土山に宿る、當所の名茶、あけほのと云新茶をもとめ、煎じのむ按摩同士、せり合ひいるも旅泊の情いとお
かし

六日夜深く起出、挑灯をともし、爰をたつに、四五丁もゆく比、雨ふり出しければ、雨具を付乍阪はてるく鈴鹿は曇るの哥の如く

土山の雨に火ともす螢かな

大野にて火打をもとめ、六左衛門といへる茶屋にて江戸行の茶を注文して新茶をのみ

摘だだけ新茶に焚て仕舞けり

水口宿に、甲賀三郎の碑、鴨長明發心所の印有、長明は十訓抄ニ大原にて入て僧と成り蓮胤と改む、甲賀三郎の父ハ、醍醐天皇の御宇、信州諏訪重頼、男子三人有、嫡子を望月太郎重家、次男を諏訪二郎貞頼、三男望月三良兼家と云り、勅託により若狭の山賊を亡すに、兼家武功あるを兄二人猜んで、谷へ突落し、自身等の高名とす、兼家不思議に命全ふして立かへる、二人の兄逐電す、兼家ニ近江國甲賀郡を賜り甲賀近江守と云、爰に碑有、夏身にて中食、雨よふく上り、石部も過、梅の木にて奥州熊の傳三の藥賣、四人壹人は小熊を曳ゆくに、小熊眠り、自由にあるかぬもをかし、目川も過、草津姥が餅にて暫しやすらひ、矢走に來るに今出る舟有、是にのるに順風に帆を上て、直に大津小船入に着、八丁を過、走井にて支度する内、又雨ふり出し、郡山の商人と道づれと成り、追分より醍醐も過て、六地藏にて茶をもとめ、桃山より指月へ出て、夕方伏見船着につき、夜食すみて夜五ツ時雨ますます降るに船を出す

七日夜明に日本橋へ船つき、目出度歸宅せしこそ嬉しけれ

歸阪後の戯れ

供の僕を堺の親もとへかへすとて

紫蘇賣の砂こほし行板間哉

ことし五月節旬には家毎に、昏細工の鯉を高き竹にゆひ付、門幟にかゆること流行するを見て

生さきを祝える鯉の竹のほり嚙りうもんで仕たらよかろう

借むべし尾上梅壽身まかりければ川柳を吐

菊五郎が死んで幽霊出なくなる

古家は買かぶれども梅のはな

以前口ずさみては隠れ家を捨て、五十に近き身に妻をもたぬは雙が岡の兄貴が言ひ草を守り生涯旅籠に世を過す

は山崎の坊様の不性に習へりことは西行のまねならねどくくの清水町に汲ほす返もなき家居をまつらひ長
明が方丈記の心して綺語文章を書

鍋尻をいつも焦さぬ庵涼し

嘉永二己酉年六月

守り
能く
む

解題

一 この『うめのはつ花』は、國文學者藤の屋のあるじ渡邊保教の自筆稿本。もとより未刊行の書であります。本文十二丁。はしがき一丁は備中の人中邨寛の作で、これも自筆で書かれてをります。

一 本書の内容は、新町の温習會を、國文で書いたもので、巧にこまやかにかゝれてをります。作者は一度、稿を起して清書したのを、更に後日、筆を加へたものと思はれます。今次これを翻刻するに臨み、最初の清書を抹消した部分は、活字の左側に縦線一本を施し、書き直した文字は右方に六號活字を添へることに致しました。また本文中に括弧をつけてある部分は二度目に書き加へられたものです。元來、國文でかゝれたものゆゑ、假名文字が頗る多く、作者みづからも讀む人のために所々漢字を當て、をります。が、本書の校訂者は更に假名文字に對し、より多くの漢字を當て、讀者諸氏に讀み易くいたしておきました。淺學非才、或は妥當を缺いたところも往々有らうとは存じますが、どうか御寛恕を希ふと共に御示教を賜りたいと存じます。念のために申します、作者が書き添へられた漢字は、原本には、本文の左側にありましたのを

右側に移しました。そして校訂者が書き加へました部分も、やはり本文の右側に置き、その漢字の上下に括弧をつけて、區別をして置きました。

一 本書の著作は、天保二年辛卯(我が二四九一西曆一八三二)即ち此の温習會が催された直ぐ後のこと、推察されます。天保二年といへば、水野越前のアノ改革より十年以前のこと、丁度安治川口を浚へて天保山が出来た年です。梅の浪速としては、永く記念せねばならぬ年でした。本書の作者渡邊保教、はしがきの筆者中邨寛の傳記につき、小竹園森繁夫氏の示教によりますと、

中邨 寛、通稱彌三郎、號は小柴舎、備中都宇郡二子村の人、歌道を藤井高尙に問ひ、文政の頃大坂にあり寺小屋を開き、和歌を教授す、生年歿年共に未詳。

渡邊保教、通稱彌平次、大坂の富商にして國學を中村良臣に受く、著書に『よし野の山つど』寫本一冊あり、生年歿年共に未詳。

とのことです。

一 本書は本會相談役南木芳太郎氏の文庫に藏せられてをりましたのを、今回氏の厚意により、本會に提供されたのでございます。

うめのはつ花のはしかき

いまの世に能としもいへる(古)いにしへの申樂(名残)のなこりにては(早)やうよりやんことなき御前に
てもものす業(物)なるをいと珍らしき事こそあれ難波(遊女)に名たゝるあそひ(雅)ともの集ひにつとひて
そのわさまねふとか人のいへれはいかにみやひやかにをかしからむとゆかしく思ひ居るに
あはせて保教ぬし來ませり藤の屋(より)の近きわたりにてかゝるすち(筋)このめる人なれはいちはや
くものしてそのあるやうを例のあや言葉もてかい(書)ゑるしてみせらる片はしより見もてゆく
にいとこまやかにそのあやきぬの色あひまさま(洩)もたらさすかきつめられたりさるあて人
のかきりつとひてもものすなるをいとよくまねひ出られたれば目かやくはかりにおほゆる
もうへなりけり柳さくらの野邊の錦に先たちてかをりみちぬるこち(初花)するをはつはなとし
もいはれしいたくひけしてみつからつけられたる名にそ有けるかくいふは吉備の道の中
より浪速の小玄はの屋に來りをる

中 邨 寛

ことし天保二年新町のあそびども仕舞さらへとかいひて能といふもの物すとてまさ月のはじめつかた西口にまふ(正)
(殊更)ところことさら二つくりて廿七日の夜よりミかもよほすとなむさだめおきたりけりさるはちぢのたからのつどひ(集)
(客人)船場わたりのまろうどまちうけむの心しらひなりければおのれ見にゆかむことはかけても思ひよらざりしをふつ(二)
(夜)かめのよ亥の時ばかりながしが方よりとて友だちの文もてく此人はいとまめやかなる人にてこまふとよきた(來)
 ればいなミがたくて此つかひの女にしたがひつゝ行風はけしくみぞれさへふりかゝりていとたへがたしされどほ(程)
 ど近ければたゞはしりにはしりていたるつねはいとあやしきところなれどまくうちまわ(た)しつゝいかめしく志(常)
 なしけりこゝにたてつらねたるあかしのゑよかりそめなる垣のもとニ小松ありこはかの能のはしが、りとやらむ(此)
 をかきたるなるべしかど(門)挑灯(燈)の(橋掛)いるよりさんじきのけはひいとほなやかなり富士の山にかすミを(懸)きたるこ(懸)
きとこににあかしともしつゝさんじきのきざみにつりてかもなどうるはしうまきはへたり正面のかゝりむしろもてふけるやねなど(簾)
毛氈緒籠緒籠其筋のさまをいとよくうつしたれど右のかたにをすのおりたる(所ある)そいとあやしきやかくて座につらなりて
 んればはや翁とやらむはすみて高砂といふこく也なり此おぢおばのすがたはいさゝか能にたがねばしるさす
 べてうつくしきすがたを見せんとの志わはざなればおもてはつけざりきさるはかしらの雪のいとほしたなくて人(頭)

うめのはつ花

人あたらしき事ニ思ひおるニ四海浪静にて何とかやうしろなるをこのうたふとおほへしがかのたれこめたるゆ
 かのうちより江戸ごまといへるをかけてミツのをごとはなやかニ引すましわかやかなる女の聲にてかけども落葉
 のなどうたふ是にあはせてたち舞さま(こと)かはりてをかし此まふかたへに花田の純子のまくもて何かかくした
 る所ありまばしありてふたりともこのうちにいるこは仲入とやいはんほとなく人出て幕あなたニおしやれば松竹
 梅をうゑたるおほいなるすはまのもとにおちおばと見へし舞子のかみもくろみ姿かはりて立る也けりひとりあ
 かきしをせにかめと水とをぬひたるうへのきぬ松葉のをりもの、はんひ(になにか唐めきたるかたの縫ものせり
 袴は白きにふた藍と浅きどりとを二寸ばかりづゝぬきにおりてぞきたるける)をぞきたりける今ひとり白きあ
 やをこゝかしこかのこまだらに染つけて金のはくもて雲がたおしたり帯は天鷲絨とか黒くつやゝかなる二色々の
 糸もて貝桶をなんぬひたりかみはゆらくとしてあいぎやうもこほるゝばかりなればすよしの浦もほかならず
 いかではまぐりひろひてんとしたにおもふもおほかりけり是はてゝ又笛ふく人よりせちに出て座につく此人々は
 黒きすあをに白きものもて例の(ふじの山にひさこをなんすりて)すりたるきたりとばかりありてやかただつもの
 座に立る二つぎてをかしけなる女子枕もち出て此上におくこはかんたんといふ曲にてわらへまでもしりたればゆ
 ゑよしへもらしつやがてかみに座したる人よこ笛とり上て高く吹立るほと子も過ぬべしねふたけなる子らもおど
 ろきて耳をさらへなどす又をかし此廬生にて出るあそびは若鶴太夫とかいひて花ならばさくらにもたとへつべく

さまかたちことなり白あやにはくもて雲がたすりたるうへのきぬした(下重)がさねは物にかくれて見えず孔雀の尾のか
 たをりたるくちべいろの錦のころもにこん地のゑぞにしきのけさをかけ右にから扇をとり左には数珠をつまぐ
 りたり髪はをどろのごとくみだしたればすごきけさへそひて身にしむばかりおほゆるにやがてかのまくらにより
 ふしぬかくて壽太夫とかいへるあそび大臣の妾にて(なるあそび)玉のこしをもたせ(きて)楚國の帝の位をゆつる
 べきよしおどろかしければミづからもあやしと思ふさまながらとかうしつゝさきのごとまくのうちにいりぬ此
 にて淨るりといへるうたひものはつかにうたひ出たり
 あひだミツのをごしたへ引たり(聲いとよし)こまかニ面白さしてさうぞくして出たるすがたよろづからめき
 ていとまばゆしくちなし染の縹子にくも水の丸をぬひたるきぬきて平緒にもたつをものしとよりくれなるのひも
 をいとながくむすびさけ玉のかうふりをなんきたりことさへぐ唐の帝のすがたなれどおのづから(おもゝちなど
 たをやかにえんになまめきたり)おもゝちなどたをやかに太液の芙蓉未央の柳にたとへたる楊貴妃のかたちもこ
 れにはけおとりぬべしとさへ思はる大臣のあそびも□□□か猶うちそやすに壽太夫出ておなじくちなし染のき
 ぬに紺地のたけやまらうへにうちおほひて(くれなるのひもをいとながくむすびさけ)水晶をあまたつらぬきた
 る扇もたるまたなくきよらなれば(かの太液の芙蓉未央の柳にたとへたるきさき□□にもまさりて)けに此上やあ
 るべきとおもひおるニから子につくりたるわらへ四人梅の花がさ持出て太鼓ニ合せてまふさまいはけなくらうた
 しこたびもミツのをごにあはせてはつるならんと思ふニ廬生のあそびせまきやかたのうちにて上段のがくとい

ふものをおほきやかに袖うちかへしまひおふせつみなひとあきればて、うつゝとは思ひやらす

たをやめのひかりか、やくよそほひニ見る人さへもゆめご、ちせり(さしつきて唐のわらへにつくりたる

□□□四人おなじきぬがささしかざしをかしき哥にあはせてうちまふさまいはけなくらうたし此たびも(三味線)の

ごとにあはせてはつるあらんと思ふにろぎといふになりて淨るなりやとりましへつゝあはすおどろくばかりよ

くもたゝきたるわざにぞありける)まことや舞子の役々あるせしものには花子うつほざるなどやうの狂言とやら

んもかいつけたれど(かく能のミ物するは)まだとゝのはぬことありて今宵はもらすにやあらん又かりに名のミの

せたるにやあらん戀のおもにといふさるがうハ白河院菊をふかくこのミ給ふあまりおまへにアマたうゑさせ給ひ

て山科の莊司といふ賤きをのこを花もりになしたまひ年毎にかの下葉などとらせ給ふほと二いつしか女御の御す

がたを見奉りおほけなくも戀となりてあつしく日ころになりゆくをいとあはれとおもほしつゝこりさせんの御心

にておとどに勅をたまはりいと重き荷を錦につゝ、いとものゝかららかにしなしてかのいやしきものにおほせも

度)たび千たび御庭(のあたり)をめぐりなば又も御姿をまみ給ふべきよしつけ給ふニ此をとこ荷の重きをあらで

我こひのつもりしにやとくるしきをねんじてアマたゝび御庭をめぐるになほたえすしてついにむなしくなりしよ

し作れる也けりおのれ此こくハ其うたひもゝのまきをかなたよミおほえおれどたはやすく傳る曲ならねば

近きころはする人もあらずいかなるわざをするならんといとどゆかしくおもひおるに次第とかいふをうたひおハ

りて例の幕かたへにおしやればかべに達磨大師の畫をかけ火とりに錦のあつぶすまおほひてたをやめのうつらう

つらねふりおる也けりきぬは青濃色の縹子にいろゝの糸もておほいなる菊の花ぞぬひたるうらハからをりもの

(朽)くち葉いろなめりうへにうちかけたるも縹子にやあらん黄つるばみに薄花田を松かハとかにつぎてかミにはわか

松に鶴をアマたゑがきて赤き雲がたおきすそにはうめや何やぬひていとみやびかにこめきたり文をもちつゝ立あ

がるほとゆかのうちより三味せんのことさうのことをあはせて夕ぎり文章といへる今やうのうたうたふひとり

は津山檢校がをしへにて此さとに名たゝる花丹やの小さんさては難波都といふめしるなりとか人々きゝふけり

てとる盃もさしおかれつゝおのづからのどやかなればさくとする女のみぞさうくしけなりや此まひ子は山村友五

郎といへる此道のひじりがむすめなれば扇の手などいことなりかゝるほとに太鼓おどろくしくうちなら

せば掛たる畫ぬけ出て女のわらへとなる年もまだ十ばかりなればいとものうたうたおひさきこもりて見ゆかし

(そばちかくよびてこひし人のもとにて消息す)こはわざおぎに物する夕ぎり伊左衛門ならんと思ふにあはせて

あミがさきたるをそこ此わらへにいさなはれて)出くきぬは花田の天鷲絨に黒きをまじへつぎて文字ぬひたり帯

は鳴にやわすれつかの能のさまはなくてかひなきこゝちするをかゝる上手のかぎりなればなかゝおもしろしこ

ゝより又淨るりにといふ物にあはせていとゝちめやかにあやしき心にさへなりぬ仕舞はてたりとてみな人立

さわぐにあたりを見めくらせばあそびどもいろゝにさうぞぎつゝ物いひかはしたるなどえんにたをやぎたるは

柳さくらをこきませてといひし都の錦にもまさるべかめり中にも名たゝるかきりハミナヒのうちきだつものうへ
(緋) きたりさくところを(紅)なくれなる扱は紫などの絹を前にあて、行かふこはやごとなき女房のうへのはかまのうつ
(仲居) りたるにやと例のすがたなれどをかしおなじさまなるを(女)瓶子(持)のへいじなるやもたるがけいしこほくくとふみなら
(下駄) しなめけにの、しりつゝあなたより出てゑひしれ人に行あたりともたをれんとするにあそびどもかしらまさ
(来) ぐりつゝ、髪も何もそこなはれんとてつづやくいとことわりなりかしやうく物見の座まづまるころ鼓ことさら
(芳野) にうち出ればよしのといへるあそび法師の姿にて出く(こは鉢木といふ曲にて人志りたる事なれど哀ふかく其ま
(女) さまのをかしきにいさゝかするさんとす)をみなに宿をかふにあるじの留守なりとてかさよりければ志ばし軒に
(壺折) た、すみてまつ此女はやまと錦をつほをりてきたり法師はわな天鰲絨とかやいふ白ききぬに黒染のけさかけてさ
(笠) が錦もてかしらつゝ、みちいさきかさきたりほとなくあるじかへりていといいたう侘たるさまなれど(白縹のむもん
(經) の)唐の錦を色々につぎしうへのきぬすあを(素袍)は紫のたてに黄のぬきををりたるなるべし法師ふたゝび宿をかふニ
(宿世) あまりニ見ぐるしとて山本の里とやらんををしへやりぬ女いたみてすくせつたなき身はかゝるをりだになど聞ゆ
(かたち) るにあはれすゝみぬればまだ遠くはとておひつきてやどしぬまことやさきにいふべきをわすれたりかゝるあて人
(わ) にはつきくしからぬをあながちにそどのかしてものするわざなれば例はミづからいへる言葉どもみな地うたひ
(あそび) とかいへるにゆづりてその中より人をわけてうたふなどいことわり也かし)此舞子も先々のおとらすふるめ

かしくはえなきさうぞくはくちをしけなれと世にふるさまにてハさもありぬべしざるをすこしくやミがほなるも
(装束) をりからにつかはしきや)かくて夜寒のもてなしにとて朝夕いたはりつる鉢木を切火にたきまるらせんと(たち
(一節) 出るほと素袍も衣もほとけてすべりおちぬ下にハ唐のおり物を色々につきてきたる也けり)雪うちほらふけしき
(武藏證) つらふさまいとよしこゝよりひとへ切とかいへるをむさしあふみにはあらで例の江戸ごまかけたるミつのをにあ
(あそび) はせてほそ吹ならすにこのまひ子ちさき刀もち先梅をきりて薪となしぬおちにかゝらましかばなミだもおちぬ
(必) べし法師せちなる志をめで、名をとへどいはずやうくにして佐野のながしとなのかまくらニことあらんを
(乗) りかならずすきれたりとも物の具とりてとうたひ出れば又ゆかのうちよりさびたりとも長刀かいこミといひつゝ
(あそび) のり地とやらんになるに此まひ子かたぬぐ梅の花に鶯といふ文字をぬひたるあこめだつものきたりさてものがた
(梅) りおはりて二たひ切し枝たきそふるにふしぎや今までくち木と見えし鉢木たちまちさかえ時めくこは例のまくに
(櫻) たがひて白きちりめんとやらんにうめさくらまつをゑがきてかく見するなりけりこの中にかくれてほとなくあら
(松) へれ出たるすがたいとはなやかなりかの木のたましるにやあらむあるじになりたる舞子は白ききぬに(あかきを
(緋) うちかけてともに)松をぞぬひたる女は梅法師のあそびハひのちりめんに櫻をぬひたるうへのきぬ浅きどりの繻
(あそび) 子におなじくさくらをぬひて金糸とやらんのみもとちつけたるをなんきたり梅櫻松ととりく花がさもちつゝ足
(をかし) もとどろにふみならず太鼓小鼓さへうちませたれば(まして)いとにきハしくえんになまめきたり 切くべし

松もさくらも若かへり盛りをミする春ぞたのしき
 是はて、石橋といふこくになりぬこのまてとやらんは誰
 袖太夫とかこはよそひたるさまを見するのミにてあ、の曲はかの友五郎がむすめ扱は伊左衛門になりし扇やのそ
 いぞまふ也ける誰袖太夫ハ獅子王にやあらん裳からきぬうるハしくうちかさねて几帳のもとにをりめのわらハふ
 たるの舞子もみなひの羅紗に白き毛を菊のきせ綿のおほきさにところへぬひておなじ毛の帯したりかくことさ
 ら二今のおりものもてさうぞきたるハ獅子とおもハれん心しらひなるべしとばかりありて又かくとやらんになる
 小蝶のすがたにてふりつとミもちつ、かたミにうちならしとかうしつ、ミたりハうちに入にひとりなほのこりて
 立まふあり扇の手とかいふ手なと世にしらすをかし仲入になれば例のごとあひかたりといふなん出嶋（花田のおりもの）の天鷲絨の
 はんひ白きぬめに何やかやと紋あまたかきたるさしぬき（おほえず）言葉はかのゆかよりぞいふめることにおも
 き（曲）こくなればにや鼓うつ人々のすがたみなあらたまりぬほうたんのはなをかきたる白きすあをなりけり扱戸ばり
 か、ぐるにおほきなる臺ふたつもち出人々座につきて笛ふきすますにほとなくかのふたり扇かさねたるあかきか
 しらいたゞき身をひそめてはしり出ぬ太鼓右のばらひとつにてた、ミかけてうつにきうになりてこなたさまにあ
 ゆみくる足つき（さるがくに）いしき舞人にもまさりぬべしやがてかしらうちふりてたけにあまれるかミをこと
 もなげにあらふさましつ、うち亂れまひたはむるけしき誠の獅子の出きたりてくるふならんとさへおもはるさて
 するおきし臺は石橋（イシハシ）となるに誰袖太夫もかしづきのわらハも又あ、がしらをいたゞきいで、橋をわたりなどす此

橋かさ、ぎのわたせるにはあらねど今は夜もいたくふけぬらんと思ひしもしるくことはて、見ればひんがしさへ
 しらみぬ

藤の屋のあるじ

保教しるす

插圖并ヂンク版 目次

晴翁漫筆序文(7—9)	晴翁漫筆原本第一丁表(15……)	天平盃と神供餅(18……)
神酒瓶之圖(19……)	極樂寺堂前の石燈籠(21—22)	長木之圖(25……)
三輪若宮靈廟の御足跡(28……)	弘法大師筆、藥師佛圖(28……)	野口助左衛門之庖刀(35—36)
聖德太子の洞簫(33—39)	蘇莫者略圖(40……)	南都春日社御田植之圖(44—45)
感神院と長刀鋒(49……)	佐々木信胤の古城跡(53—57)	河内枚岡の禁札(60—61)
槻竝の大同竹(64……)	鬼貫の碑(70……)	永源寺の紅葉(74—75)
鳴神三弦の圖(80—81)	大和の姥ヶ峯(84—85)	女盲と板金剛(91……)
芭蕉翁木像(94……)	俳仙堂額と水月の文臺(95……)	芭蕉翁涅槃像(96—97)
四方佛の手水鉢(105……)	葉椀の御供(107……)	神供平居菴之圖(109……)
神饌の唐櫃(110……)	近衛次將并掛甲(111—113)	春日神社寄進之燈籠(115……)
東大寺戒壇堂の圖(116—117)	四天王之圖(118—119)	大蛇退治神樂之圖(123……)
牟倍之圖(126……)	高麗國鐘銘(123……)	楠公の奉納旗(132……)
楠延尉の旗(133……)	元祿享保の文豪(142—143)	勸善懲惡の述作(156……)
大石良雄自作の硯(162—163)	蜀山人の像(171……)	籠耳集原本第一丁の表(181……)

明和雜記原本第一丁表—(368……)	明和の五匁銀—(292……)	鏡	到	火—(319……)
髮切—(351……)	錢—(352……)	綺語	文	草序辭—(365—366)
俳諧系譜—(371—373)	題詞—(374……)	浪花土産月名殘	浪花土産月名殘—(379……)	再び笠着の催し—(384—386)
浪花土産月名殘裏表紙—(382……)	浪花土産月名殘添書—(383……)	會稽雪後日鉢木摺物—(402—404)	富士山—(491—493)	蜘蛛の水の繪—(441……)
花魁若八總段書之次第—(399—401)	伊豆山權現と熱海—(547—549)	鉦鏝町圖—(444……)	潮來出嶋—(586—587)	熱海溫泉宿相模屋の圖—(528—529)
相模屋二階坐敷の眺望—(536—537)	萩—(594……)	相模屋二階坐敷の眺望—(536—537)		

昭和四年六月廿五日印刷
昭和四年七月一日發行

(非賣品)

浪速叢書

不許	複製
----	----

第十一

編纂校訂者 船越政一郎
大阪市西成區松原通二丁目四三

發行者 江崎政忠
大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内
浪速叢書刊行會代表理事

印刷者 長谷川泰三
大阪市東成區鶴橋南之町二丁目五七八五

印刷所 桃谷印刷株式會社
大阪市東成區鶴橋南之町二丁目五七八五
電話南 三〇六二番

發行所 浪速叢書刊行會
大阪市北區宗是町一番地大阪ビルヂング内

電話土佐堀六六二二番
振替口座大阪七七三六三番

一 本叢書は、元和以降この浪速——我等が愛するこの大阪——に關する編著記録のうちから、過去の浪速文化を回顧せしめ、未來の浪速文化を生ましむべき、眞に永遠の價値あるもの——中には未刊行のものが大部分を占めて居ります——を收め、後の世に傳へたい希望の下に着手されたものです。

一 本叢書の題字は、帝室御物聖德太子御筆『法華經義疏』の寫眞のうちから求め出したものです。我國に於ける文化工藝の祖におはすばかりか荒陵山四天王寺の創建者として我が浪速との因縁が頗る深い太子の御筆蹟を、我が叢書の題字とすることを得たのは、本書の誇りと考へて居ります。

一 本叢書は原本の挿畫を一枚も省略せず、力めて原本の面影を傳へたいと心がけて居ります。

一 本叢書の用紙は王子製紙株式會社の別漉紙で、成るべく讀者諸氏の眼の疲勞を軽減したい用意が籠つて居ります。

一 本叢書の組版印刷製版製本これらの技術は桃谷印刷株式會社が其の一切を擔任し、及ぶ限りの努力を惜しまないと意氣です。

一 本叢書見返しの畫は、日本畫壇の異彩菅楯彦氏の筆。表紙の布は、我國織物界の偉材龍村平藏氏の意匠に成つたもので、現に我が讀書界に好評噴々たるものがございます。

一 本叢書刊行會の理事は伊藤秀雄、林安繁、堀越壽助、室谷鐵腸、小林利昌、江崎政忠、木間瀬策三、森下博、末吉一郎の諸氏。顧問は今井貫一、和田萬吉、幸田成友、内藤虎次郎、内田貢、黒板勝美、藤井乙男、新村出、關一の諸氏。相談役は石割松太郎、橋本耕之介、南木芳太郎、上松寅三、佐古慶三、三宅吉之助の諸氏です。(諸氏の姓名はいづれもいろは順に依る)

浪速叢書

(全十六卷)

所收目錄

第一	攝陽奇觀	第九	大阪商業史資料
第二	攝陽奇觀	第十	大阪訪碑錄
第三	攝陽奇觀	第十一	稿本隨筆集
第四	攝陽奇觀	第十二	地誌
第五	攝陽奇觀	第十三	地誌
第六	攝陽奇觀	第十四	風俗
第七	攝津名所圖會大成	第十五	演藝
第八	攝津名所圖會大成	第十六	索引



新編

